

前事不忘 後事之師（前事不忘 后事之師）

徳毛 貴文

前事不忘 后事之師（qián shì bú wàng hòu shì zhī shī）。

「過去のことを忘れなければ、将来の手本になる」「前の事を忘れず、後の戒めとする」といった意味だ。

2008年7月9日から13日までの「友好の原点を歩く旅」に参加し、方正、撫順、瀋陽などを巡った。各地の戦跡に、この「前事不忘 后事之師」が大書されていた。

「前事」を忘れるどころか、知る機会が乏しいのが今の時代だ。旅先で「見たこと」を正しく理解できているかどうか疑問だが、思いつくまま、まとまりなく、すこしスケッチしてみたい。



大連・中山広場の「大連賓館」(7月9日)

日本統治時代の建物が写っている。これらの建物が、それぞれ中国銀行大連分行、遼寧省対外貿易経済合作庁、中国工商銀行中山広場支行などとして、今も使われていることに驚く。周囲には近代的な高層ビルが並び立ち、この一角だけややアンバランスな雰囲気だ。

日本統治時代の建物であれば、忌み嫌われ、とっくに取り壊されるべきと思うが、今なお利用されていることは意外に思う。

哈尔滨

大連から飛行機でハルビンへ。翌朝、ホテル近くのハルビン駅（哈尔滨站）周辺を歩いた。午前7時前だというのに、駅前には切符を求める人、出迎える人、白タク運転手、荷物持ち——

大連

今回、最初に訪ねたのが、大連・中山広場の大連賓館（大連賓館）。1914年建築で、もとは満鉄直営の「ヤマトホテル」だった。

玄関を入ると正面に、1920年にホテル屋上から撮影された中山広場の写真パネルが掲げられている。横浜正金銀行大連支店、大連警察署、朝鮮銀行大連支店など広場を臨む形で、日



ハルビンのホテルの「天気予報」。ロシア語が併記されている(7月10日)

と大変な人ごみだ。立錫の余地がない、というのはこういうことを言うのか。タクシーは赤信号だろうが歩道だろうが平気で突っ込んでくる。この騒々しさが中国の魅力でもあるのだが。



高速道路で方正へ。沿道には、見渡す限りのトウモロコシ畑が広がる(7月10日)

方正へはハルビンから高速道路で向かった。「ハルビン市郊外」と説明されることが多いが、その距離180キロ。3時間ほどかかる。中国は日本の尺度で考えると間違う。

高速道路の沿道は、なだらかな地平にトウモロコシ畑がどこまでも広がっていた。

照りつける夏の日差しの中、戦火に追われて畑の中を逃げ惑う入植者たちの姿が、ふと見えたような気がしたのだが。

方正・中日友好園林

方正県人民政府の表敬訪問、方正県革命烈士記念碑を見学した後、日本人公墓へ。

日本人公墓のことを知り、日中科学技術文化センターへ大類善啓氏を尋ねたのは3年前だった。その後、3回目の訪中で、ようやくここへ来た。

松林の間をざわわ…と流れる風の音しか聞こえない。旅の参加者、曹洞宗の野田尚道住職が読経をし、一人ひとりが手を合わせた。

ただ、実のところ私にとって、公墓そのものは、静かにそこにたたずんでいるだけだった。

それよりも感動したのは、ハルビン到着以来、ずっと私たちに付き添ってくれた「養父母連絡会(日本留華孤児養父母联谊会)」の秘書長、石金楷さんが、方正県人民政府の前で前日に撮った記念写真を添え、公墓のある「中日友好園林」のブックレットとともに我々一人ひとりに届けてくれたことだ。



読経の中、公墓に手を合わせる(7月10日)

22ページのブックレットは方正地区日本人公墓、麻山地区日本人公墓、中国養父母公墓をはじめ、園林内の施設や開拓団跡地などの写真が収められ、全ページ、カラープリンターでコピーした上で、表紙を付けてきれいに製本したものだ。おそらく決して安い費用ではないだろう。しかも表紙裏には「2008年第2次増訂制作」とある。

前の日に撮った写真を全員分、プリントまでしてくれ、石さんの心配りを感じた。

私たちが伝えなければならないのは、公墓というものが存在する歴史は、もちろんなのだろうが、石さんのような友人が遠く離れた中国にいるということなのだろう。

方正県人民政府が、中日友好園林には管理人（張林さん）まで置いてきれいに整備していたのに対し、方正県革命烈士記念碑は全く管理している様子がなかった。

私たちは、まず革命烈士に先に手を合わせるべきだろう、と考えたのだが、碑にはヒビが入り、敷地は草が生え放題。由来を示した案内板はガラスが割れ、説明の紙は日に焼けて赤茶け、はがれかかっていた。記念碑の敷地のそばは産業廃棄物の捨て場になっており、異臭が漂っていった。

記念碑の裏のいくつかの墓石には花が供えてあったのが救いに思えたが、碑は1987年に建てられたばかりである。この差はいったい、何なのだろう。



中日友好園林の「陳列館」には、開拓民が遺した時計、食器、ラジオ、ミシンなどがあつた。銃剣まであるのは、彼らが「北方防衛」まで押し付けられていたためか(7月10日)



ハルビン・中央大街で。翌日、北京五輪の聖火が来るとあつて、旗などのグッズが大売れ。翌朝のハルビン駅前も、小旗を持った若者であふれていた。聖火はルート非公表の上、厳重警備だったが、彼らは無事に「ナマ盛火」を見ることができたろうか(7月10日)

撫順戦犯管理所

ここはもともと、日本軍が中国人を収監した施設だったと聞く。共産党政権発足後、日本人や旧満州国幹部、国民党関係者などを収容したそうだ。現在は改修中で、本来は見学できない上、訪問した7月12日は土曜日だったが、候桂花所長は私たちのために特別に時間を取り、内部を案内してくれた。

前日に訪ねたハルビンの「侵華日軍731部隊遺址」が、旧日本軍の非道を徹底的に告発する施設で少々気が滅入っていたこともあり、「再生の地」と呼ばれる施設での候所長の計らいはありがたかった。

当時を再現した施設は、理髪室、パン焼き釜、医務室、運動場などが備えられていた。囚人室も一段上がった台の上であり、居心地も悪くなさそうだ。決して食糧事情がよくかった当時の中国で、戦犯たちは白米を食べることができるなど、人道的な待遇を受けたという。

ただ、塀の上には電気が通っていたであろう鉄線が張り巡らされ、ここがやはり戦犯の収容所だったことをうかがわせた。

受刑者たちへの異例の待遇は、周恩来の指示だったという。だが、ここの職員たちが皆、その指示に全面的に賛成していたわけではなかったろう。

そのことを候所長に尋ねると、彼女は「教官たちは、心情的には許せなかったが、これが自分の今の仕事だと思っていた。毎日毎日、自分の気持ちを整理していた」「個人的感情を隠して教育した結果、戦犯たちは改心していった」と答えた。

確かに、その通りなのだろうが、釈然としない思いも残る。自分の親兄弟を殺した（かもしれない）相手を前に、そんなに簡単に自分の気持ちを殺せるものなのか――。

そこを彼女は、「周恩来の政策だからだ。『撫順の奇蹟』は、中国政府の政策の奇蹟だ」とも話した。

なるほど、許すも許さないもなく、「国の政策」だからか。中国という国のあり方を垣間見たような気がして、少し複雑な気持ちになった。

恐らく周恩来の考えには、中国のシンパを作るための計算や長期的戦略もあったはずだ。単純な「人道主義」では片付けられないかもしれない。

だが、もしそうだとすると、「政治」とは「そういうもの」だろう。

そして、それで「撫順の奇蹟」の持つ意味が薄れるわけでもない。



撫順戦犯管理所で説明する候桂花所長(7月12日)

平頂山惨案遺址記念館

撫順では、1932年、日本軍が地元村民3000人を虐殺し、ガソリンで死体を焼き、山を崩して死体を埋めたというジェノサイドの地、平頂山惨案遺址記念館も訪ねた。

ここではなんと、発掘された遺骨800体をそのまま「展示」していた。

刀で突き刺された跡が残る頭骨、母親が子供を守るよう

に抱いている遺骨——。黒一色のこれらの遺骨が80メートルの長さにわたって、掘り出されたままの姿で広がっていた。



「3000」の数字をあしらった平頂山惨案遺址記念館の入り口のレリーフ(7月12日)

だが、と思う。

掘り出された場所にそのまま建てられたという記念館は、エアコンが寒すぎるほどに効き、遺骨群は分厚いガラスで覆われ、照明は抑え気味にセットされていた。どこか、ただの「展示物」を見ているような感覚に襲われた。

不謹慎の誇りを覚悟で言えば、これでは「見せ物」ではないか、とも思う。中国側からは「お前が言うな」と冷やかに突き放されるかもしれないが。



早朝の瀋陽で。朝もやを突き破るように聳える建設中の高層マンション。中国の現在の勢いを象徴するかのようだ(7月13日)

発掘された遺骨の一部は、13日に訪ねた瀋陽の「9・18歴史博物館」にも移されていた。この遺骨は「浮き彫り」のように「展示」されていた。

共産党政府への求心力を高める「愛国教育」のためには、もしかしたら「これ以上のものはない」のかもしれない。

<とくもたかふみ、会社員、43歳>